

Sak-3

資料名 北樺太事情概観

出所

作成年 193501

寄贈者

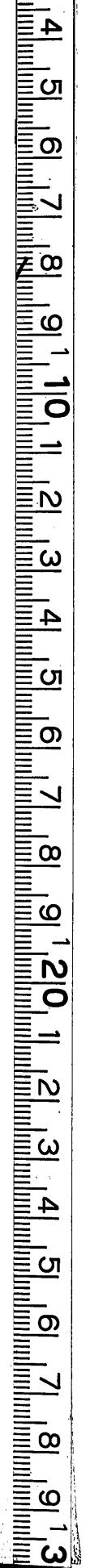
受入 調査部

注記 表紙には経済研の? 1934年ごろの現状

86P 25×18cm

25
71

北
樺
太
事
情
概
觀



目次

一 歸屬ノ沿革

二 地勢

位置及面積

海岸線

地形大要

主要山脈

河川

三 氣象

四 人口及主要市街地

A、人口

九 九 五 四 四 三 二 一 一 一

小樽高等商業學校	
調査部	
門部	2/5
部番號	71
册	

B、主要市街地

一〇

C、住民種族

一三

五、行政

一八

六、産業

二三

總説

二三

A、石油

二五

沿革

二六

油田ノ分布

二七

現況

二九

日本側石油利權會社ノ成績

三一

B、石炭

三三

沿革

三三

主要炭田

三六

現況

三七

一九三四年度薩哈連石炭トラスト

各炭坑別採炭計畫高

三九

日本側石炭利權企業ノ成績

四一

C、林業

四三

現況

四七

D、漁業

四九

ソヴイエト化以後ノ推移ト現況

五二

E、農業及牧畜

六一

集團農場化ノ成績

七、交通及通信

六二

概 說

六七

A、道 路

六九

B、鐵 道

七一

C、航空路

七二

D、海上交通

七六

E、郵便、電信

七七

八、教育及衛生

八〇

一、歸 屬 ノ 沿 革 (一九三五年一月譯)

明治八年(一八七五)日露兩國政府間ニ千島樺太交換條約成立シ、永ク其ノ歸屬問題ニ關シ兩國間紛議ヲ重ネ來レル樺太島ハ茲ニ露國ノ領有ニ歸シタルモ、日露戰爭ノ結果ポーツマス條約(一九〇五年)ニ依リ北緯五十度ヲ境界トスル南樺太ハ邦領トナリ次テ一九一七年ノ帝政崩壞ニ關シテ起レル東京府ノ混亂中偶々尼港事件(一九二〇年)勃發ヲ見タル爲、一九二〇年ヨリ一九二五年ニ至ル迄ノ間北樺太ハ日本軍ノ保證占領下ニ置カレタリ。

一九二五年日「ソ」兩國間ニ北京條約成リ皇軍ハ占領ヲ解除徹退シ同年五月十五日ヨリ北樺太ノ行政權ハ現ソヴィエト政府ノ手ニ歸シ以テ今日ニ及ヘリ。

二、地 勢

位 置 及 面 積

北緯五〇度ヨリ五四度三〇分、東經一四一度三〇分ヨリ一四四度ノ間ニ位シ面積ハ二千六百万方里（三萬八千平方糎）ニシテ邦領南樺太ヨリ約三百方里大ナリオホーツクノ蒼浪東、北兩岸ヲ洗ヒ西岸ハだつたん海峡ヲ狹ンテ沿海州ト相對ス、海峡ノ幅ハ南部ニ於テハ二十五里ニ達スルモ北部ハ約七里、其ノ中部ノ最モ狹キ箇所、即チボゴビ（北樺太側）ラーザレフ（大陸側）兩岬間ニ於テハ僅々二里餘ニ過キス。

海岸線

東西兩岸トモ海岸線ノ屈曲ニ乏シキモ東海岸ニハルンスキー、ナピリスキー、ヌイスキー、チヤイスキー、ピリトウーン、エハビ等ノ入江點在シ千噸級以下ノ船舶ヲ容ル、ニ足ルモノアリ。

西海岸ハ緩徐ナル彎曲ニ依ル海岸線ニシテ殆ト屈折ナク加フルニ隨所ニ斷絶壁海ニ迫リ干潮時ト雖モ通行困難ノ場所少ナカラス、從テ港灣ト稱シ得ヘキモノナク偶

偶港灣類似ノモクアリト雖モ悉ク西方ニ向テ開放セラレ居ルヲ以テ現在ノ如キ殆ト無設備ノ状態ニ於テハ西海岸ノ特徴タル北風及西風ノ猛威ニ對シ全然無力ナリ、斯ノ如ク大陸ニ面シテ一ノ良港モ存在セス從テ沿岸來航ノ船舶ハ一度強風起ルヤ直ニ拔錨シテ沖合又ハ對岸ヲカストリ港等ニ避難ヲ餘儀ナクサル、有様ナリ、斯ノ如キ事情ハ本島ノ交通上將又經濟發展上一大障害ト云ハサルヘカラス。

地形 大要

北樺太（以下薩哈連ノ名稱ヲ並用ス）ノ地形ハ南北ニ長ク東西ニ狹ク幅員廣キ所モ三十五里ニ過キササルヲ以テ、島内ニ於ケル水系、山系モ亦自ラ南北ニ發達シ、中央低地帯ハ本島ヲ縱斷シテ東西ノ兩山地ヲ分チ、東西ノ兩山地モ亦南北ノ方向ニ並走スル幾多ノ山岳ヨリ成レリ、即チ地相上ヨリ大別セハ（一）中央低地帯（二）東部山岳地帯（三）西部山岳地帯トナスヲ得ヘク、西部山岳地帯ハ本島ノ最北端ヨリ起リテ南端ニ

走ル山地ニシテ本島面積ノ過半ヲ占メ、東部山岳地帯ハ東海岸中部ツイミ河々口附近ニ起リテ南走スルモノヲ云ヒ、中央低地帯トハ右兩地帯ノ中間ニ介在スル幌内、ツイミ兩河ノ流域ニシテ島内唯一ノ平原ヲ形成スルモノナリ。

主要山脈及河川

東部山脈、國境附近ヨリ東海岸ニ沿ヒ北走スルモノ、之ニ屬スル島内ノ最高峰ネウエリスキー山（海拔二、〇一二米）ハ樺太島ノ二大河ツイミ河及幌内河ヲ生ンテ南北ニ流下セシム、山脈ハ北走スルニ從ヒ高度ヲ減シ北緯五二度以北ニ至レハ七〇〇米ヲ超ユル山岳ナシ。

西部山脈、國境附近ヨリ西海岸ニ沿フテ、最高峰ハ國境附近東經一四二度半ノ地點ニ在リ標高一、六六七米ト稱セララル。

河川

島内ノ主要河川ハツイミ、幌内ノ兩河ニシテ地形ニ從ヒ南北ニ流ルツイミ河ハ源ヲルイコフスタ附近ニ發シ北東ニ流ル、コト七十餘里ヌイヌキ一入江ニ注キ河幅百餘間ノ所アリ薩哈連最大ノ河ナリ。

其他小河川多數アルモ東西ニ分流スルモノニシテ主ナルモノハ西海岸ノアグネウオ、ピレウオ、ナイナイ、大アレクサンドロフカ、東海岸ノナビリ、ランゲリ其他二、三ナルカ何レモ短小ニシテ運輸、交通上些シテ價值ヲ有セス僅ニ木材流送ニ利用セララル、程度ナリ。

三、氣象

薩哈連ノ氣候ハ之ヲ北方ヨリ圍繞スルニ大寒流ノ影響ヲ被ル所多ク寒流ハ共ニオホツク海ニ起リ一ハ其ノ東北部ヨリ西南ニ向ヒ本島ノ東岸ヲ洗ヒ他ハ西北部ヨリ發シテ南流シ本島西岸ニ沿ヒ海峽ヲ過キテ日本海ニ入ル、之等寒流ノ影響ト本島ノ山脈

カ風向ト並行シ之ニ對スル障壁ノ用ヲナサ、ル地理的條件ニ依リ歐洲ニ於ケル同緯度ノ地ニ比シ本島ノ冬ハ頗ル長期且ツ寒冷ニシテ夏季ハ冷涼ナリ、冬季ハ大体十月末ニ始マリ四月中旬ニ了ル、十一月上旬ヨリ降雪多ク積雪量ハ無論年ニ依リテ異ルモ概ネ五、六尺程度ナリ。

海面ハ十二月ニ結氷シ大体翌年四月ニ至リ解氷ス、此間黒龍江海灣最狹部ニ於テハ大陸トノ水上交通自由ナリ、即チ約半歲ニ亘リ結氷ノ爲船舶ノ沿岸來航不能ニ陥ルヲ以テ本島ノ交通並經濟發展上ニ大ナル影響ヲ與フルハ言フ迄モナシ。

又薩哈連ノ氣象ヲ述フルニ當リ特ニ記サ、ルヘカラサルハ九月以降屢々西海岸ヲ襲フ北風及西風ノ急激且ツ猛烈ナルコトナリ、遼東スヘキ港灣ナキ西海岸ニ於テハ之カ爲船舶ノ遭難スルモノ少ナカラス、黒龍江下流及オホーツク海カ低氣壓製造所ト觀アルハ周知ノコトナルカ更ニ十月以降ニ至ルハ大陸ヨリ東行スル暴風ヲモ加ヘニ

十米以上ノ速力ヲ以テ吹雪ヲ伴ヒ來リ長キハ一週間ニ亘リ連日燻マサルコトアリ。
亞港ニ於ケル氣壓、平均溫度、最高及最低溫度、降水量、雪日數、風向、平均風速等ヲ表示セハ左ノ如シ。

一九二二年乃至一九二五年及一九二〇年之平均

人口及主要市街

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
氣壓	七六〇。六	七六三。〇	七六一。一	七五九。二	七五七。八	七五五。〇	七五五。一	七五六。四	七五九。〇	七五九。三	七五八。九	七五七。一	七五八。五
平均溫度	(一) 一七。一	(一) 一四。一	(一) 八。七	(一) 一。三	(一) 五。五	(一) 一。〇	(一) 四。八	(一) 七。〇	(一) 一四。一	(一) 一六。六	(一) 一五。四	(一) 一〇。一	(一) 六。一
最高溫度	(一) 二。二	〇	六。五	一七。八	二〇。〇	二三。〇	三〇。一	二八。五	二六。七	二〇。〇	一六。二	一五。五	一三。〇
最低溫度	(一) 三三。八	(一) 三一。九	(一) 二六。六	(一) 一八。五	(一) 五。九	(一) 〇。五	(一) 一。三	五。四	〇。〇	(一) 〇。〇	(一) 三。〇	(一) 三。五	(一) 三。八
降水量	五六。〇	一九。六	三四。一	三一。二	三二。四	二六。一	七七。四	九六。九	六八。七	五九。七	五四。五	四四。八	六〇。一
雪日數	一六	一四	一三	八	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二〇	一〇
最多風向	南東	南東	南東	南東	北	南西	南	南東	南東	南東	南東	南東	南東
平均風速	五。一	四。一	四。九	四。二	四。一	三。三	三。七	四。二	五。二	七。四	〇。七	五。九	四。九

六〇〇〇〇人

月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
南西	三〇・二	三三・七	四〇・二	五〇・二	五八・一	六五・五	七五・六	四〇・六
南東	〇	〇	〇	八	一八	二〇	二〇	一〇一
南東	二六・一	二四・四	二六・六	二八・六	三〇・五	三二・四	三四・八	六〇一・六
南東	〇・五	〇・三	〇・四	〇・〇	〇・〇	〇・〇	〇・五	一三三・八
南東	二二・〇	二〇・二	二八・五	二六・五	二〇・〇	二二・二	一・五	三〇・一
南東	一四・〇	一四・八	一五・〇	一四・六	一四・一	一六・六	一五・四	一〇・一
南東	五五・〇	五五・〇	五五・六	五五・〇	五五・六	五五・八	五五・一	五五八・五

昭和十一年八月三十一日現在

四 人口及主要市街地

A、人口

薩哈連ノ人口ハ一九二四年ニ於テハ總計一萬二千人ニ過キサリシカソヴイエト化以來當局ハ島内資源開發ノ爲銳意移民獎勵ニ努メ來レル結果爾來十年間ニ約六倍ノ増加ヲ遂ケ一九三四年現在島内ノ全人口ハ七萬五千人ヲ算スルニ至レリ、然レトモ之ヲ邦領南樺太ノ夫ニ比スレハ尙約四分ノ一ニ過キス、以テ經濟發展ノ程度モ亦未タ旺盛ナリトハ稱シ難シ。

因ニ一九三〇年以降ノ人口増加ノ跡ヲ示セハ左ノ如シ

年度 島内人口

一九三〇年 約四〇、〇〇〇人

一九三一年 々六〇、〇〇〇人

一九三二年 約六五、〇〇〇人

一九三三年 々七二、〇〇〇人

一九三四年(春) 々七五、〇〇〇人

B、主要市街地

アレクサンドロフスク(亞港ト略稱ス)

人口 約一二、〇〇〇人(一九三四年)

同市ハ北緯五〇度五四分東經一四二度一〇分ニ位シ現在薩哈連州行政ノ中心地ニシテ市制ヲ布ク、薩哈連唯一ノ開港場ナリ。

- 州執行委員會。共產黨州支部。市ソツイエト。内務人民委員部州支部。外務代表部。
- 州民警本部。税關。郵電局。州裁判所。國立銀行支店。薩哈連石炭トラスト本部サフウーゴリ
- 薩哈連林業トラスト本部。薩哈連國營漁業トラスト本部。航空化學飛行協會支店。

等其他各種官公衛及經濟機關ノ所在地ニシテ電燈、電話、水道(俄官領軍設備)ノ設備ヲ有ス。

人口 約三二、〇〇〇人

現在薩哈連州第一ノ大市街タルト同時ニ最大ノ工業地ナリ。餘暇薩哈連ノ北方一隅ニ位スルオハヲシテ今日アラシメタルモノハ關フ迄モナク同地方産出ノ石油ナリトス。ソツイエト聯邦側ハ薩哈連石油トラスト本部ヲ此處ニ置キ。日本側ノ北緯太石油株式會社ノ鑛業所亦此處ニ在リ。一九三四年四月ヨリ市制ヲ布ケリ。

人口 約一二、〇〇〇人

西海岸南部ニ在リ俄々三、四年前迄ハ一寒村ニ過キサリシカ州内ノ漁業發展ニ伴ヒ

之ニ要スル船、川崎船、船業用機其他ノ客器類製造地トナリ現在ニ於テハ州内有效ノ工業地ト化シツ、アリ。

オクテヤプリスキ―炭坑（舊名瓦ガートイ）

人口 約三、二〇〇人

オマツトイ

州内「ソ」側炭坑中規模最大ノモノニシテ一時盛時運石炭ト等スト本部同地ニ在リタルコトアリ、ボシヨロ―タ、ソウイエトヲ有ス。

ビリウオ

人口 約三、三〇〇人

西海岸國境附近ニ位シ邦領安別ト指呼ノ間ニ在リ、アタネ等、北等ト共ニ西海岸ニ於ケル木材積出地及鯨漁撈中心地トシテ知ラル。

トクエ

土威及マカリエフスキ―炭坑

人口 約三、〇〇〇人

日本側石炭利権ノ經營中心地土威ハ「ソ」側炭坑マカリエフスキ―ト隣接シ、前者ノ人口（邦人、露人、支鮮人合計）約千八百人、後者約千二百人ナリ。北樺大鑛業株式會社土威鑛業所ノ一九三四年十月一日現在、邦人従業員ハ家族ヲ合シ四百九十餘人ナリキ。

c、住民種族

島内住民ノ種族ハ雜多ナルモ大体ニ於テ大口シヤ人、ウクライナ人、白ロシヤ人、猶太人、日本人、支那人、朝鮮人及ギリヤク、ツングース、オロチヨン等ノ土人ナリ、其ノ種族別員數ニ關シテハ最近ノ統計ナク唯土人ニ付判明セル事項ヲ記セハ左ノ如シ。

土民（ギリヤク、ツングース、オロチヨン）ノ人口

一九二六年以來土民人口ノ増加左ノ通ナリ。

一九二六年	二、〇一九人
一九二九年	二、一二八人
一九三一年	二、一三三人
一九三四年	二、一五六人

土民ノ現況

イ土民ノソヴィエト化

最近迄原始的ナル方法ニ依リテ漁撈（主トシテギリヤクノ生業）、狩獵、馴鹿飼育（ツングース人）ヲ營ミ轉々放浪ノ生活ヲナシ居タル土民モソヴィエト政權下ニ於テ教育普及集團經濟化ニ伴ヒ漸ク從來ノ面目ヲ改メツ、アルモノ、如ク露語ニ巧ナル者多キハ勿論、既ニ二個ノ土民 區 ライオン 執行委員會ヲ有シソヴィエト大會ニハ議員

代表數名ヲ出席セシメ居ル狀態ナリ。

一九三四年度ニ於テ共產黨關係ヨリ見タル土民現況左ノ如シ。

黨 員	一九人
コムソモール	七一人
ピオネール	一三一人

(ロ)土民經濟生活ノ變遷

島内ソヴィエト化直後ニ於テハ當局ハ政治的、經濟的ニ無智ナル土民ニ對シ懷柔策ヲ用ヒシニソヴィエト政權ヲ謳歌セシメントスル態度ヲ持シタルカ近時漸ク之ニ成功セルモノ、如ク今ヤ一步ヲ進メテ彼等ノ集團經濟化政策ニ移リ現ニ着々強行中ニシテ所謂富 農又ハ反「ソ」的分子ノ掃蕩ニ努メツ、アリ最近一、二年間ニ於ケル此種土民ノ逮捕、島外追放ニ處セラル、モノ相當數ニ達スル模様ナリ。

從テ土民一般ノ經濟生活ハ從來ノ個人經濟ヨリ漸次集團經濟ニ移行シツ、アリ、一九三四年現在ニ於テ土民間ニ漁民ヨルホ一五、集團農場ニ、馴鹿飼育ヨルホ一ズニ存在ス。

而シテ一九二八年以降一九三一年迄ノ四年間ニ土民ノ漁業組合ヨリ國家カ買付ヲナシタル漁獲物ノ價額ハ左ノ通ナリ。

一九二八年	一八一、〇〇〇留
一九二九年	一七九、〇〇〇々
一九三〇年	二一八、〇〇〇々
一九三一年	三〇二、〇〇〇々

イ土民ノ文化狀態

ソヴイエト當局ハ土民ノ教化ニ多大ノ熱意ヲ拂ヒ學校、病院、購買組合賣店等ヲ

メ各種文化的施設ニ努メ居レルカ就中土民兒童ノ教育ニハ力ヲ注キツ、アリ、今土民兒童ノ就學數増加ノ跡ヲ見レハ左ノ如シ。

一九二五年	五七人
一九三二年	二三五人
一九三三年	二六四人

尙一九三四年現在本土ニ於ケル中等學校及專門學校ニ遊學中ノ土民青年ノ數八十一名ニ達ス。

又土民ノ爲ニ設立セラレタル病院二、購買組合販賣店六ヲ算シ、土民ヲ一定部落ニ集結定着セシムル事業ニ對スル費用トシテ一九三三年度ノミニテモ政府ハ約十萬留ヲ支出セリ。

之ヲ要スルニソヴイエト當局ハ所謂レニシテ民族政策ニ基キ土民ノ啓發ト産業獎勵

ニ相當ノ施設ヲナシ。近時漸ク成果ノ認めハキモノアルニ至レルモノ、如シ。

三 行 政

帝政時代ニ於ケル本島行政ノ沿革ヲ見ルニ初メ樺太島一島ヲ以テ薩哈連州ヲ形成シ、黒龍江州、沿海州、堪察加州ト共ニ當時ハバ「ロフスク」市ニ政廳ヲ置キタル沿黒龍江總督ノ管轄ニ屬セリ。

州政廳ハ亞港ニ在リテ軍務知事駐在シ。沿黒龍江總督ノ隸下ニ軍事並ニ州内ノ行政事務ヲ總括管掌シタリシカ一九一一年軍務知事ハ廢セラレ文官知事任命セラレタリ之ヨリ先一九〇五年南樺太ヲ我邦ニ割讓シ薩哈連州從來ノ區域縮小セラレタル爲一九一五年ニ至リ時ノ沿黒龍江總督ズンダツチハ沿海州ヨリウドスキ一郡ヲ割キテ薩哈連州ニ併合シ之ト同時ニ州政廳ハ亞港ニ移リタルカ亞港ニハ副知事駐在シ島内一切ノ行政ヲ處斷セルヲ以テ中心ハ依然亞港ニ在ルノ觀アリタリ。

一九一七年革命ノ結果中央ニ於テハ一應ケ「レンスキ」政府ノ出現轉覆ヲ經テ幾何モナク現ソヴイエト政權ノ樹立ヲ見タルカ其ノ間極東ニ於テハ幾多泡沫的政權ノ起伏交替アリ加アルニ外國聯合軍ノ西比利出兵アリ大小政治的事變相踵テ到リ此ノ裡ニ在リテ北樺太ノ政情亦走馬燈的變轉ヲ經タルカ就中一九二〇年ヨリ二五年ニ至ル五年間、日本占領軍ノ民政下ニ置カレタルハ北樺太ノ行政上特異ノ一時代ヲ畫スルモノト云フヘシ。

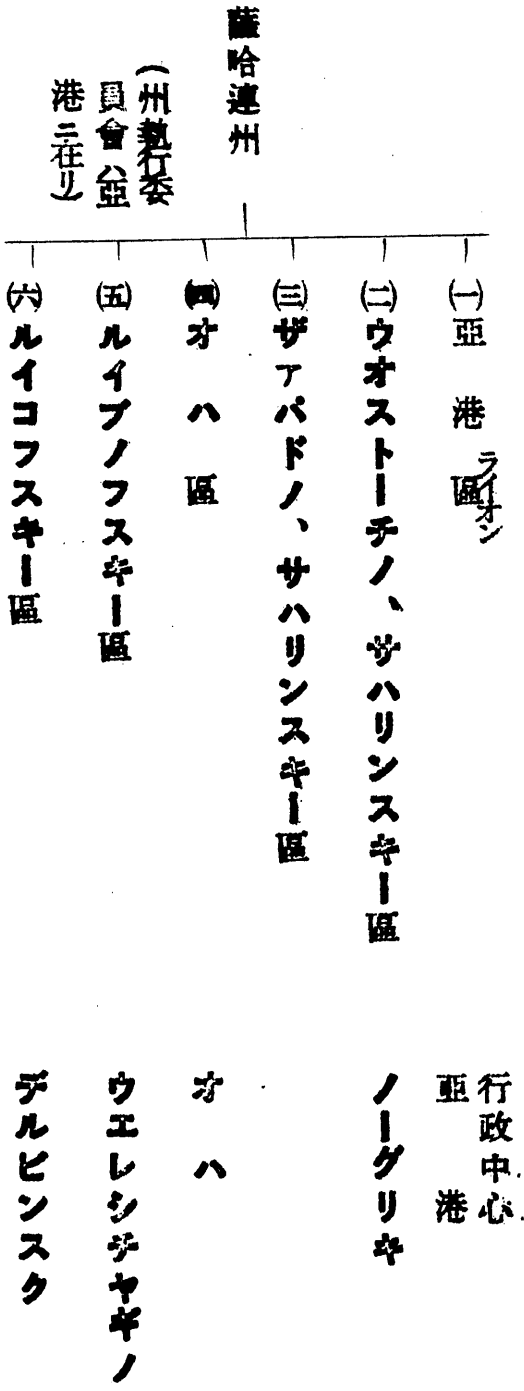
一九二五年島内ノ行政權ヲ日本軍ヨリ引繼キタルソヴイエト政府ハ初メ薩哈連全土ヲ以テ一ノ管 區トナル極東地方ニ屬セシメ薩哈連管區ハ更ニ之ヲアレクサンドロフスク 區、ルイコフスキ一區、オホ區、ルイブノフスキ一區ノ四 區ニ分チ(ライオン)ハ更ニ多數ノ村ニ分タル)亞港ニ管區革命委員會ヲ置キ島内ノ最高行政機關トナシ政府ノ任命スル管區革命委員會議長ヨシテ之ヲ主宰セシメ又各區ニ在リテハ管

區革命委員會ノ任命スル區革命委員會ヲシテ行政事務ニ當ラシメタリ。

其後一九二九年ニ至リ行政組織ノ形式改造セラレ從來ノ政府任命ニ依ル革命委員會ヲ廢シソヴイエト選舉(民選)ノ形ニ依ル執行委員會ヲ置クコトトナリ茲ニ當國全般ニ行ハル、ソヴイエト制度ノ軌道ニ上レリ、即チ セリスキ 村ソヴイエト及水シヨルコ、ウイ、ソヴイエト(水シヨルコ)ハ都市ト村トノ中間的行政單位ニシテ工業及商業的勞働者ヲ住民ノ大部分トシ他ニ農民ヲモ含ム等ノ下級機關ヨリ ライオン 區ソヴイエト、更ニ州ソヴイエトト順次選舉ニ依ル上級機關ヘノ代表者選出ヲ行フ自治制度ニシテ各當該ソヴイエトハ自己ノ執行委員會ヲ選出シ、同執行委員會ニ於テ行政權ヲ行使スルモノナリ。

一九三二年極東地方ノ行政區劃變更行ハレ之ニ伴ヒ薩哈連管區ハ薩哈連州ト改メラレハバ、ロフスタヲ行政中心トスル極東地方ニ隸屬シ、之カ管下ノ一州ヲ形成シテ今日ニ及ヘリ、此ノ間州内ノ行政區劃ハ屢々改變セラレタルカ現在ノ區劃ハ一九三五年一月廿五日附全露中央執行委員會幹部會決定ヲ以テ制定セラレタル所ナリ。現在ノ薩哈連州行政區劃ハ左ノ通ナリ。

(註、ライオン 區以下ノ村及水シヨルコトク名ハ茲ニ之ヲ略ス)



註、(1)州執行委員會ニ於テハ右(三)ノザアバドノ、サハリンスキー區ハ一九三四年

中廢止セラレ現在別ニ西海岸南部ニシローカヤ、パチヲ行政中心トスルシ
ロコバーヂンスキー區ナル一區^ラ設ケラレ居ル趣説明シ居レル處、茲ニ
ハ一九三五年一月廿九日發刊ソヴイエトスキー、サハリン紙ノ報道ニ從フ
コト、セリ

(ロ)亞港及オハハ市制ヲ布キチ市ソヴイエトヲ有シ各自夫々一ノ行政單位ヲ構
成ス

(ハ)亞港市ハ附近ノコルサコフカ及ミハイロフカ村ヲ包含シテ州執行委員會ニ
直屬ス。

州執行委員會ニハ財務部、組織部、教育部、保健部、供給部、社會保險部、計畫委
員會、經濟調查部、土地部等ノ各部ヲ置キ市ソヴイエトハ財務^{ホズチヨート}課、近郊農場管理^{セクシヨン}
課、保健課、公衆食料課、運輸課、國防課、工業課、公共課、革命法案課、郵電課、

教育課、商業コオペラチーフ課等ノ各^{セクシヨン}課ヲ有ス。

六 産 業

總 說

帝政時代永ク遠隔恒寒ノ孤島視セラレ單ニ流刑地トシテ名ヲ知ラル、^ニ過キサリシ
本島ニ於テ産業ノ見ルヘキモノ無カリシハ怪シムニ足ラス、而シテ當時島内資源ノ
開發(主ニ炭坑經營)ニハ主トシテ囚人ヲ使役シタルヲ以テ過去ニ於ケル本島ノ産
業ハ流刑囚ト至大ノ關係ヲ有セリ。

流刑囚ハ千島樺太交換條約成立以前即チ一八七五年迄ハ其ノ數少ナク一八五八年開
坑セラレタル土威炭坑ノ坑夫代リトシテ送致セラル、^ニ過キサリシ處、其後一八六九
年八百人ノ囚人團ヲ送り、次チ一八七九年頃オゾツサ港ヨリ六百人ヲ送致シ團体的
流刑ノ端ヲ開ケリ。

一八八〇年當時樺太島内流刑囚總數ハ二千四百人トナリ囚徒部落ノ創設モ相當數ニ達セリ。

一八八〇年ヨリ一九〇〇年ニ至ル二十年間ニ於ケル送致囚徒總數ハ三萬四千四百餘人ニ達シ、其ノ創設部落ハルイヨフスコエ、デルピンスコエ、亞港、コルサコフ、ツイモフスコエ、ミハイロフスコエ等ヲ始メ百十箇村ニ及ヘリト云フ。

當時之等囚徒ハ土威、亞港、ルイヨフスコエ、コルサコフ（現在ノ大泊）、オノール、デルピンスク等ノ監獄ニ收容セラレ獄内及獄外作業ニ服シ、刑期ヲ終ルヤ流刑移民ノ名稱ノ下ニ茲ニ殖民トシテ出獄シ、指定地ニ於テ開墾ニ從事セシメラレタリ。之等囚人ノ酷使、虐待、流刑移民ノ搾取ハ言語ニ絶シタルモノ、如ク死亡者、逃亡者續出シ、從テ之ヲ使役シテ行フ開坑又ハ開墾事業ハ當局ノ意ノ如クナラサリシハ勿論ナリ。

日露戰爭終熄後斯ノ如ク流刑殖民政策廢止セラレ囚人送致モ亦停止セラレタルカ之ト共ニ住民ノ大半ハ大陸ニ去リ一時ハ二萬餘ト註セラレタル樺太移民モ一九〇五年ニハ四千五百人ニ激減シ村落中荒廢ニ歸スルモノ續出セリ。

次テ歐州大戰ノ勃發、帝政崩壞、極東政情ノ混亂相踵テ起リ島内産業ノ開發亦自ラ頓坐ヲ來セリ。

一九二五年島内行政權ソヴイエト政府ニ歸シテ以來當局ハ極力労働者ノ移住、定着ヲ獎勵シ（課税及給與上ノ特典ヲ設クル等種々ノ移民吸收策考案サレタリ）以テ資源開發ニカメ來レル結果産業ハ逐年發展ノ途ヲ辿リ一九三二年度ニ於テハ島内産業ノ主要部門タル石油、石炭、林業、漁業ノ總生産額ハ三千七百萬留ニ達シ更ニ一九三三年度ニ至リテハ七千二百萬留ニ躍進シ空前ノ成績ヲ示シ居レリ。

薩哈連ニ於ケル油田ノ發見ハ一九世紀末葉ニ屬シ當時ニコラエフスク在住ノ一露人毛皮買出ノ爲北樺太ニ渡來セル際土人ノ話ニヒントヲ得テ普ク海岸地ヲ踏査セシメ遂ニ東海岸ウルタト湖及オハ河口附近ニ於テ石油ヲ發見シ政府ヨリ採油權ヲ得テ事業經營ニ着手セリ、之一八八〇年ノコトニシテ本島油田開發ノ端緒ナリ。次テ同人ノ女婿ゾートヲ志ヲ繼キオハ、ノイグリキ、ヌイスキーノ三箇所ニ試掘ヲ行ヘルモ好果ヲ收メ得ス、資金其他ニ窮シ業半ニシテ死セリ。

日露戰爭後ギジギレ、獨逸人タレ、等相次テ試掘ヲ企テタルモ悉ク失敗ニ歸シ當時外ニ有力ナル石油會社一、二アリ多數石油鐵區ヲ得テ角逐セルカ、或ハ資金ノ缺如、或ハ調査計畫ノ齟齬、設備ノ不充分等ノ爲成功セルモノナク一九二〇年皇軍薩哈連占領ニ至ル迄ノ樺太油田開發史ハ失敗ノ一語ニ盡クト云フモ不可ナシ。

日本軍占領當時我カ海軍省援助ノ下ニ組織セラレタル北辰會ハ初メテ薩哈連油田經營ニ相當ノ成功ヲ收メ現在ノ日本石油利權企業ノ基礎ヲ築キタルモノナリ。一九二五年北京條約成リ同條約議定書ニ基キ同年十二月莫斯科ニ於テ「ソ」聯邦政府及北薩哈連石油企業組合間ニ利權契約締結セラレ組合ハ薩哈連東海岸ニ於テオハ、エハビ、ヌトウ、ピリトウ、チヤイウオ、ウイグレクトウイ、カタングリノ八油田地ニ採油及試掘權ヲ獲得シ直ニ作業ヲ開始シ、越ヘテ一九二六年現在ノ北樺太石油株式會社設立セラレ石油企業組合ノ權利、義務ヲ繼承セルカソヴィエト聯邦側ハ一九二八年薩哈連石油トラスト(サフネフチ、トレスト)ヲ創設シオハヲ中心トスル自己油田ノ開發經營ヲ行ヒ爾來兩者相對峙シテ事業ノ擴張發展ヲ計リ採油量モ逐年増加ノ途ヲ進ミテ今日ニ及ヘリ。

地質學者ノ薩哈連油田調査ハ一八九〇年バチエーウイチノ實地踏査ヲ嚆矢トシ其後
二、三學者ノ調査アリタルモ孰レモ充分地質状態ヲ明カニスル能ハサリシモノ、如
シ。

其後一九〇七年ヲ第一回トシ有名ナル地質學者バレウオイ氏カ兩三回ニ亘リテ行ヘ
ル實地調査ノ結果略々北緯五十一度三十分以北五十三度三十五分附近迄ノ東海岸一
帶ハ石油含有地域ト認メラル、ニ至レリ。

東海岸ニ於ケル主要油田ニシテ世上ニ知ラレタルモノハ左ノ如シ。

- オ ハ。 エ ハ ビ。
- ヌ ト ウ。 ピ リ ト ウ ー ン。
- チ ヤ イ ウ オ。 ヌ イ ウ オ。
- ボ タ ー シ ン。 ノ ー グ リ ヤ。

カタングリ。

現 況

現在薩哈連ニ於ケル産業ノ王座ヲ占ムルモノハ石油ナリ。

ソヴィエト政府ハ極東ニ於ケル交通、運輸、工業上オハ石油ノ有スル意義大ナルニ
鑑ミ、之カ開發ニ異常ノ力ヲ注キ、現ニ一九三二—三四年ノ間ニ於テ州内ノ主要産

業四部門（石油、石炭、林業、漁業）ニ對シ支出セラレタル四千萬留ノ國費モ其ノ

五割七分ハ石油事業關係ニ當テラレタル狀況ナリ、從テ其ノ採油量モ近年急激ニ増

加シ一九二九年度ニ於テハ僅カニ島内全採油量ノ〇。三三%、一九三一年度ニ於テ

ハ日本利權企業ノ三分ノ一ヲ出スニ過キサリソソヴィエト側ハ一九三三年度ニ於テ

ハ既ニ採油量日産約五百五十噸トナリ日本利權會社側ト相半ハスルニ至リ夏ニ一九

三四年度ニ於テハ我カ會社ヲ遙ニ凌駕シ最近ハ日産約八百噸ヲ唱フル模様ナリ。

サフネフチ、トレスト(オハニ本部ヲ置ク)ハ今日迄ノ處カダンダリ、ゴロマイ、ランゲリ等ノ油田試掘ヲ行ヒカダンダリニ於テハ作業開始ノ準備ヲ有スルモ現在主力ハ専ラオハ油田ニ注キ居レリ、因ニ一九三三年ニ於ケル同トレストノ労働者、勤務員總數ハ四千五百人ニ達ス。

一九二八年創立以來ノサフネフチ、トレスト採油成績ハ左ノ如シ。

一九二八年	日産	約八〇噸
一九二九年	年産	二六、〇〇〇々
一九三〇年	日産	三〇〇々
一九三一年	々	五〇〇々
一九三二年	年産	一八八、〇〇〇々
一九三三年	々	二〇〇、〇〇〇々

一九三四年 々 二五五、〇〇〇々

右ノ如ク「ソ」側ハ年々採油量ヲ増加シ、施設亦充實擴大セラレツツアリ、例ヘハオハヨリ三十七軒ヲ隔ツル西海岸モスカリウオ港トノ間ニ北樺太唯一ノ鐵道ヲ有スル外特ニオハ一同港ノ間ニ送油管ヲ布設シ同港ニハ貯油タンク(一萬噸タンク一基、五千噸二基)海底輸送管、送油パイプ等大陸ヘノ石油積出ニ必要ナル設備ヲ了シ最近ハバローフスクニ建設セラレタル大精油工場ニ對シ供給ヲ行ヒ(一九三四年度輸送計畫八十萬噸)今ヤ極東ニ於ケル工業上、交通上將又軍事上薩哈連石油ノ有スル意義漸ク重キヲ加ヘントスルニ至レリ。

日本側石油利權會社ノ成績

薩哈連ノ石油業ヲシテ今日アラシメタル功績ハ既述ノ如ク日本人ニ負フ所大ナルモノアル處、一九二五年ノ北京條約ノ結果日本ノ得タル石油利權經營ノ爲設立セラレ

タル北樺太石油株式會社ハ逐年健實ナル發展ヲ逐ケ今日ニ及ヘリ、同社ノ事業ニ關シテハ既ニ世上ニ知ラル、所多キヲ以テ此處ニハ省略シ只同社創立以來ノ薩哈連產油内地輸送量ヲ年度別ニ示スニ留ム

年 度	内地輸送原油量 (ソ側ヨリノ買油ヲ含ム)
大正十五年度	二〇、六一五・五噸
昭和二年度	四四、九六七噸
三年度	八九、五二一噸
四年度	一三一、五二六噸
五年度	一九八、八二三噸
六年度	二七二、二八四噸
七年度	三一三、四四九噸

八年度	三一三、六二一噸 (内一〇萬噸ソ油)
九年度	二四〇、二五二噸 (内八萬噸ソ油)

因ニ石油關係ノ邦人労働者、勤務員數ハ

昭和九年一月現在	八三六人
々 八月現在	一、七九二人

ニシテ夏季ハ季節労働者渡來スル爲多ク、冬季ニ於テ減少スルハ石油、石炭兩利權企業共通ノ現象ナリ。

B、石 炭
沿 革

薩哈連ニ於ケル石炭ハ既ニ一七九八年佛蘭西人ラピルスニ依リテ發見セラレタルモノナルカ其ノ事業的ニ價值ヲ認メラレタルハ今ヨリ約八十年前ボアシニツクナル者

亞港及土威ヨリ五百噸ヲ採炭輸出セシヲ初メトス。一八六五年ニ至リ流刑囚ヲ使役シテ土威炭坑ノ採炭ヲ始メタルハ實ニ工業的開發ノ第一步ニシテ一時輸送機關缺如ノ爲中止セラレタルモ二年後再ヒ鑛山技師メイソフナル者ノ監督下ニ開坑セラル、同人ハ西海岸一帶ノ豐富ナル炭層開發ヲ企テ諸種ノ設備ヲナシ坑夫六百人ヲ使用シテ一年間ニ三萬餘噸ノ採炭成績ヲ擧ケタリ。

其後政府ハ炭坑事業ヲ監獄署ノ經營ニ移シタルカ成績振ハス結局私人ノ經營ヲモ許可スルコト、ナルニ及ヒ土威、亞港、ウラヂミロフカ、ムガーチ、ボロウインカ、ロガートウイ（現在オクヂヤプリスキート改稱）等ノ諸坑ヲ統リテ多數ノ個人商會、會社、外國資本家、相次テ出現シ相互ニ角逐セルノミナラス政府トノ間ニモ禁止區域問題（土威、亞港、ウラヂミロフカ等有望ナル炭坑ヲ政府ノ掌中ニ收メ其ノ内ノ一定區域ヲ限リテ貸與シ布度稅ヲ徵シ經營セシメタリ）等ノ爲屢々紛爭ヲ見タリ、

然レトモ當時ニ於ケル運輸機關ノ缺如ト施設不完全ニ原因スル炭質低下ノ爲、何レモ經營上良好ナル成績ヲ擧タルモノナク總テ一九一七年ノ革命ニ次ク内亂時代ニ遭遇シ情勢一變スルニ至レリ。因ニ一八六〇年ヨリ一九一五年ニ至ル五十五年間ニ於ケル薩哈連ノ石炭產出額ハ總計約八拾萬噸ナリト云フ。

日本軍占領時代薩哈連ノ石炭開發ニ關係セルハ主トシテ三菱合資會社、スタヘーエフ商會、クンスト、アリベルス、プリンネル、オリエンタル、シンヂケート及一、二ノ露人個人事業家ニシテ經營又ハ試掘セラレタル炭坑ハ現在ノ土威、マカリエフスキー、オクヂヤプリスキー、亞港、マーチ、アグネウオ、ボロウインカ、ムガーチ、ベトロフスキー等ノ諸坑ナリ。

而シテ右ノ内最モ大規模ノモノト目スヘキ土威炭坑及オクヂヤプリスキー炭坑スラ

大正十年前後ノ採炭量ハ夫々年二萬七千餘噸及一萬一千噸ニ過キサリシニ願ミ當時

ニ於ケル一般開發ノ程度知ルヘキナリ。

一九二五年日本軍撤退後、利權契約ニ依リ四十五ヶ年ノ期限ヲ以テ我國ノ獲得セル鑛區ヲ除キ全炭坑ハ茲ニソヴィエト政府ノ手ニ歸セリ。爾來當局ハ石油ニ次ク島内ノ重大産業部門トシテ銳意之カ開發發展ヲ計リ採炭高ハ過去七年間ニ約九倍ノ増加ヲ示スニ至レリ。

主要炭田

薩哈連ノ石炭調査ハ石油ヨリモ早く既ニ一八六〇年ノソツフ氏ノ調査ヲ始メ十九世紀ニ於テ數回ノ專問的踏査アリ、更ニ一九〇七年以後ニ於テバレウオイハ兩三回精密ナル實地調査ヲ行ヘリ。

主要炭田ハ西海岸ニ限ラレ亞港ヲ中心トシテ其ノ北方約十里ノ地點ヨリ南ハ國境ニ至ル迄南北約三十五里、東西ノ幅員二里乃至三里ニ亘リ廣袤六十平方里ニ達スト稱

セラル、外ニ國境以北ノ幌内河右岸及ツイミ河ノ一支流河口附近ニ於テモ石炭ノ露頭ヲ發見セリト傳ヘラル、モ調査未了ニ屬ス。

主要炭田ヲ南方ヨリ北方ニ向ツテ大別列記スレハ左ノ如シ。

- ピレウオ 地方
- ナイナイ 地方
- アグネウオ 地方
- 土威、亞港ニ亘ル西海岸炭坑中心地方
- ウラチミロフカ 地方
- ムガーチ 地方

現況

日本軍撤退後ノ一、二年間ハソヴィエト側ハ島内行政ノ整備ニ追ハレ産業方面ニ充

分力ヲ注クニテ炭坑開發上ノ施設モ見ルヘキモノ無カリシカ政情安定ト共ニ一九二七年國營企業「極東石炭トラスト」ノ手ニ依リ先ス島内ニ於ケルノ側最大ノ炭坑オクチヤプリスキー（當時尙ヨウガートウイト稱ス）ヲ再開シ一九二七年—二八年度僅々一萬噸内外ノ採炭ニ過キサリシモ兎ニ角炭坑經營ノ第一歩ヲ踏出セリ。

一九二九年政府ハ薩哈連ノ鑛、林、漁業等經濟的開發ヲ使命トスル薩哈連株式會社（略稱（アソ））ヲ創設シ炭坑事業ハ一時其ノ經營ニ移リタルモ一九三一年末同社解散ノ結果現在ノ薩哈連石炭トラスト設立セラレ石炭事業ヲ繼承シ着々經營ノ歩ヲ進メツ、アリ、此間一九二九年中メドウエーヂカ（オクチヤプリスキート隣接ス）ムガーチ（亞港北方五里）ノ試掘及調査ヲ行ヘルヲ始メ漸次マカリエフスキー、アルコウオ（亞港北方三里）等ヲ開坑シ一九三一年度ニ於テハオクチヤプリスキー、マカリエフスキー、メドウエーヂカ、アルコウオ、ムガーチ等現在ノソ側主要炭坑

ハ略々必要ナル施設ヲ整ヘ一九三二年前半年ニ於テハ之等五坑ヨリ合計九萬八千噸餘ヲ採炭シ爾來逐年採炭量ヲ増加シテ一九三四年度ニ於テハ右五坑ノ採炭計畫高ハ左ノ如キ數字ヲ示シ且ツ之カ遂行ヲ見タルカ當局ハ今後更ニ採炭量増加ノ計畫ヲ有シ作業ノ機械化炭坑労働者ノ生活改善等ニ向テ努力ヲ拂ヒ居レリ。

一九三四年度薩哈連石炭トラスト各炭坑別採炭計畫高

炭坑名	豫定採炭高
オクチヤプリスキー	八〇、〇〇〇噸
メドウエーヂカ	四五、〇〇〇々
マカリエフスキー	五三、〇〇〇々
アルコウオ	三七、〇〇〇々
ムガーチ	五五、〇〇〇々

薩哈連石炭ハ沿岸航行船舶及漁業船舶ノ燃料供給ヲ主要使命トシ沿海州石炭ト相俟
ツテ極東ノ交通上、産業上輕カラサル役割ヲ演シツ、アル處今一九二八年度以降一
九三四年度迄ノソ側採炭量ヲ見レハ左ノ通り。

一九二八―二九年度	三〇、六〇〇噸
一九二九―三〇年	五〇、二〇〇々
一九三一年度	八三、四〇〇々
一九三二年度	一四四、七〇〇々
一九三三年度	一七二、二〇〇々
一九三四年度	二八一、五六〇々

尙前記諸坑ノ外ニ亞港市附近ニジヨンキエール、アレクサンドロフスキー、ペトロ

フスキー等ノ炭坑アリ、亞港市ニ於テ經營シ地方的需要ニ向ケ居レルカ何レモ規模
大ナラス、現在ノ處辛フシテ亞港市ノ需要ヲ充スニ過キササル模様ナリ。

日本側石炭利權企業ノ成績

一九二五年ノ北京條約議定書ニ基キ石油利權ト共ニ我國ノ獲得セル石炭利權ハ(一)土
威炭坑、ウラヂミロフスキー炭坑、マーヂ炭坑(以上北樺太鑛業株式會社)(二)アグ
ホウオ炭坑(坂井組合)(三)コースチナ川上流炭坑(塚原組合)ノ三ナル處(二)及(三)ハ
目下事業ハ休止ノ状態ニ在リ、現ニ積極的ニ事業經營中ナルハ北樺太鑛業株式會社
ノミニシテ同社ハ大正十五年資本金一千萬圓(内拂込金五百萬圓)ヲ以テ東京ニ創
設セラレ鑛業所ヲ土威ニ置キテ現在迄専ラ土威炭坑ノミニカヲ注キマーヂ及ウラヂミ
ミロフスキー炭坑ノ採炭ニハ未タ着手スルニ至ラス(一九三五年度ニ於テウラヂミ
ロフスキー坑ニ着業ノ豫定)土威炭坑ノ採炭量ハ大ナラサルモ炭質優秀ニシテ該炭

製造ニ適スルヲ以テ八幡、釜石、室蘭等内地ニ於ケル製鐵所、瓦斯、セメント工場方面ニ珍重セラル。

創設ノ翌年タル昭和二年以降ノ同社内地輸送炭量ハ左ノ如シ。

(「ソ」側マカリエフスキ―炭坑ヨリノ買炭ヲ含ム)

昭和二年	四一、七七〇噸
々 三年	一〇二、二二五々
々 四年	一一二、九一〇々
々 五年	一二〇、一七〇々
々 六年	一一七、一四五々
々 七年	一三四、六五六々
々 八年	一六八、五九八々
	(内四三、七〇〇餘噸ハソ側ヨリノ買炭)

々 九年 一九七、八二〇々
 (内五二、九五〇噸ハソ側ヨリノ買炭)
 一九三四年十月一日現在土威嶺業所關係邦人労働者及勤務員數ハ四六〇人、使用露人労働者ハ千數百人ニ達ス。

C、林 業

薩哈連ノ天然資源中森林ハ石油、石炭、魚類ト相並ンテ最モ重要ナル地位ヲ占メ、其ノ使途モ建築用材、箱材、製紙原料、坑木等相當廣キニ拘ラス過去久シキニ亘リテ殆ト顧ミラレス現在ニ於テモ尙林業ノ發展ハ半歩遅々タル感アル處、其ノ主要原因ハ(イ)西北利地方ニ豐富ナル森林アル爲從來注意ヲ惹カサリシコト(ロ)島内交通ノ不便ト輸送機關ノ缺如(ハ)約半歳ニ亘リ海面結水シ積取船ノ來航不能ナルコト等ヲ擧ケ得ヘシ。

薩哈連ニ於ケル森林經營ノ跡ヲ見ルニ帝政時代ニ在リテハ何等積極的施設ノ見ルヘ

キモノナク永ク免囚農民ノ自由伐採ト炭坑業者ノ坑木採取以外ニハ殆ト棄テ、願ミラレサリシ状態ナリ、僅ニ一九〇六年レスノイ、コンドタトルト稱スル下級ノ林務職ヲ設置シテ森林管理ニ當ラシメ翌一九〇七年林務官ヲ置キ一九〇八年島内ノ森林全部ヲ國有ニ編入セルノミニシテ森林調査ノ如キモ殆ト行ハレタルコトナシ。

日本軍占領當時軍政部ハ初メテ全島ニ亘ル森林調査ヲ行ヒ三ケ年ヲ費シテ森林資源ノ全貌ヲ略々明カニセリ。

ダリレス

日本軍撤退後ソ聯邦當局ハ極東林業トラストヲシテ島内森林ノ開發ニ當ラシメタルカ一九二九年薩哈連株式會社ノ創設ニ伴ヒ、林業モ之カ經營ニ移レリ。アソハ同年中千數百名ノ伐採夫、運搬夫、トヲタター十五臺及多數ノ馬匹ヲ大陸ヨリ移入シ、ナイナイ、ピリウオ、ホニ等主要林業地域ニ據リテ着業シ一九三〇年一三一年ノ兩年ニ亘リ主要森林地帯ノ調査ヲ行フ等林業經營ノ基礎ヲ築ケリ。

サフレス

一九三一年末アソ解散ニ伴ヒ現在ノ薩哈連林業トラスト設立セラレアソノ事業中ヨリ林業ヲ繼承シテ經營今日ニ及ヘリ。

主要森林地帯 (以下軍政部ノ調査ニ從フ)

地勢ノ關係上北緯五十二度附近ヲ境界トシテ北緯太ヲ南北ニ二大別シ、其ノ森林面積概算ヲ見ルニ

(一) 南部地方 林地面積 一、九九八、〇〇〇町步

(同地方總面積ノ九〇%ニ當ル)

(二) 北部地方 林地面積 七七〇、〇〇〇町步

(同地方總面積ノ四五%ニ當ル)

北部地方ノ森林地帯ハ右ノ如ク面積ニ於テ遙ニ南部地方ニ及ハサルノミナラス開發上及搬出上ノ條件亦不利ナルヲ以テ企業的價值大ナラス。之ニ比シ南部地方ノ森林

ハ面積、蓄積材ニ於テ遠ニ優ルト共ニ北部地方ニ比スレハ差當リ林業經營ニ便ナル地理的關係ニ在リ、從テ薩哈連ノ林業ハ主トシテ南部地方ヲ舞臺トスルモノナリ。南部森林地帯ハ更ニ之ヲ(一)西海岸地帯(二)中部地帯(三)東海岸地帯ニ三分スルヲ得ヘク、其ノ林地面積ハ左ノ如シ。

西海岸地帯

三九一、〇〇〇町歩

中部地帯

一、〇七三、〇〇〇々

東海岸地帯

五三四、〇〇〇々

主要樹種別ハえぞまつ(とどまつヲ含ム)、からまつ及白樺、はんのき、やなぎ等ニシテ就中えぞまつハ總蓄積ノ七割ヲ占ム。西海岸方面ハえぞまつ純林及えぞまつ、白樺ノ混淆林ヲ以テ地域ノ約七割ヲ占メ中央地帯ニ於テハからまつ林増加シ其ノえぞまつ及白樺トノ混淆林ヲ合スレハ全地域ノ四割以上ニ達ス。えぞまつ純林ハ二割

四分ニ過キス。東海岸方面ハ一般ニ林相不良ニシテ純林減少シ、えぞまつ、からまつ及白樺ノ混淆林増加ス。

之等森林地帯ニ於ケル木材總蓄積ハ十一億三千萬石ノ巨額ニ達スルモノト見ラル、モ七億餘萬石ヲ占ムルえぞまつ、二億八千萬石ヲ占ムルからまつ等主要樹林ハ何レモ大部分老朽シ居ルヲ以テ實際ニ企業的價値ヲ有シ利用可能ナルハ、西海岸方面ノえぞまつノ約四割、中央地帯ノえぞまつ、からまつノ約二割、東海岸地帯ノからまつノ一部並中央地帯及東海岸地帯ニ散生スルどろ、やまならし、ばつこやなぎノ類ナルヘシ。因ニ之等闊葉樹種ノ全蓄積ハ二千六百萬石内外ナルカ其ノ利用可能材積ハ八十萬石ヲ超ヘサル見込ナリ。

現況

現在薩哈連林業トラストハ亞港ニ本部ヲ置キ、西海岸ニ於ケルピリウオ、アグネウ

オ、ウラヂミロフカ、タンギ、ホニ等ヲ主要根據地トシテ事業ヲ進メ居レルカ労働者、伐採器具、馬匹其他運搬機關等總テ不充ナル爲意ノ如キ成績ヲ擧ケ得サルモノ、如ク、一九三四年度ノ造材量ハ約六十萬石ニ過キス之ヲ南樺太ノ數百萬石ニ比スレハ事業ノ前途尙遠遠ト云フヘシ、因ニ一九三四年十二月現在、林区、労働者數ノ判明セルモノヲ擧クレハ左ノ如シ。

ホ	エ	労働者	一二九人
タ	シ	ギ	一三二人
ウ	ラ	ヂ	ミ
ロ	フ	カ	二七一八
ペ	ール	ワ	ヤ
レ	チ	カ	不 明

林業ノ不振ハ事實ナリト雖一九三四年度ニ於テハ浦潮及勘察加方面へ夫々鐵道枕木用材及建築材等ヲ輸送セル外本邦へモ約二十萬石ノ木材輸出ヲ行ヒタリ。

一九二八年以來ノ國營企業造材高ヲ年度別ニ表示セハ左ノ如シ。

一九二八年	二五、五〇〇立方米
一九三〇年	二七八、八八三々
一九三一年	四七四、三三七々
一九三二年	四九七、二二三々
一九三三年	四〇二、〇〇〇々
一九三四年	二二〇、〇〇〇々
一九三五(計盤)	一五七、〇〇〇々

D、漁 業

鮭、鯨、鯨及近年出現セル鰯等ヲ始メこまい、かれひ等ノ雜魚ヲ加ヘ薩哈連ノ魚類ハハ豐富ト云ハサルヘカラス。然レトモ漁業ハ往時ニ於テハ放漫ナル露國官憲ノ下ニ

50 主トシテ土民ノ幼稚ナル漁撈方法ニ依テ行ハレタルモノニシテ組織的ノ漁業トシテハ見ルヘキモノナカリシナリ。

革命以前ニ於ケル北樺太ノ漁獲高ニ關シテハ據ルヘキ資料少ナキモ信スヘキ露國官憲ノ一統計ニ依レハ沿海、河川、江灣ニ於ケル邦人及露國臣民ニ依ル一九一一年乃至一九一三年ノ三年間ニ於ケル平均漁獲高ハ次ノ通ナリト云フ。

鮭

一、九〇五石

一、二五八石

鯨

三、八四九石

往年ニ於ケル薩哈連東西兩海岸ニ亘ル邦人ノ漁業活躍ハ本島漁業史上看過シ得サル所ニシテ明治四十一年（一九〇八年）當時日本人ハ九箇ノ漁區ヲ有シ鮭一、六一七石、鯨一、六八六石、鯨一、一四五石ヲ漁獲シ其後

明治四十三年

（總漁獲高）

六、一九八石

大正四年

々

六八五石

々 五年

々

六七九石

々 六年

々

二、五八五石

々 八年

々

二、一六九石

ト消長アリタルモ占領軍撤退ニ至ル迄相當ノ成績ヲ以テ漁業ヲ經營セルモノナリ。日本軍撤退ニ伴フ北樺太ノソヴイエト化ト共ニ情勢一變シ漁業ハ漸次個人ノ手ヲ離レテ國營機關及コルホーズノ手ニ移リ一時衰微セルモ、其後年ト共ニ漁獲高ヲ増大シ以テ今日ニ至レリ、現在主要漁業地ト目サル、モノハ次ノ如シ。

西海岸南部

51

ピリツオ。モスシヤ。ナイナイ。シローカヤ、バヂ。

西海岸中部

ボロウインカ。タンギ。

西海岸北部

ルインノフスキー區 一帯

東海岸中部

チヤイウオ。ヌイウオ。

ソヴィエト化以後ノ推移ト現況

一九二五年日本軍撤退直後ニ於ケル漁業ハ一時甚タ振ハス僅ニ十二箇ノ漁業組合組織セラレニ萬六千ツエントネルヲ漁獲シタルニ過キス其後一九二九年漁業カ林業、石炭等ト共ニソソ（薩哈連株式會社）ノ經營ニ移リタル當時漸ク緒ニ就キ一九三〇年ニ於テハアソハ自己ノ漁獲及組合、個人等ヨリノ買魚ヲ合シ二十萬ツエントネル

アルニール

ノ漁獲計畫ヲ樹ツル迄ニ躍進セリ。

サフゴスタイプ

一九三一年アソ解散後ハ薩哈連國營漁業トラスト漁業ノ經營ニ當リ漁場開拓ニカムルト共ニ隨所ニ組織セラレタル漁民ゴルホーズ（一九三三年ノゴルホーズ新ハ三九箇）ト協力シトラストハゴルホーズノ漁獲物買付ヲナシ逐年發展ヲ計リ漁獲高ニ於テハ一九二五年以降左ノ如キ増加ヲ示シ來レリ。

一九二五年

二六、〇〇〇 ツエントネル

一九二八年

九五、七〇〇々

(内) ゴルホーズ漁獲高
國營々々

七〇、六〇〇々
二五、一〇〇々

一九二九年

二八、八〇〇々

一九三〇年

一五六、七〇〇々

一九三一年

一五八、一〇〇々

(内) コルホーズ漁獲高
國 營 々々

一〇九、七〇〇ツエントネル
四八、四〇〇々々

一九三二年

一七二、三〇〇々々

計別 3% 超過

一九三三年

一三七、三〇〇々々

一九三四年

二六六、一五四々々

(内) コルホーズ漁獲高
國 營 々々

一九九、六二九々々
六六、五二五々々

即ち最近九年間ニ於ケル漁獲高ノ増加ハ約十倍ニ達スル處、之ハ新漁場ノ調査開拓、
定着漁民ノ増加ト之カ「集團經濟」化、漁獲物加工根據地ノ建設等各方面ニ於ケル
施設擴充ノ結果ニシテ右九年間ニ漁業ニ對シ投セラレタル國費ハ千三百萬圓 留メ建
ス。

次ニ漁民コルホーズ數、漁民數、加工場數、漁獲物貯藏能力ニ付一九二五年ト一九

三三年ノ兩年ヲ比較スレハ左ノ通ナリ。

	一九二五年	一九三三年
漁民コルホーズ數	一二	三九
定着漁民數	三四〇人	一、三六二人
加工場 數	一五	二三
一回ノ貯藏容積	二五、〇〇〇ツエントネル	一一五、〇〇〇ツエントネル

又主要漁業地方ニ付テ述フレハ

(1) 西海岸南部地方

彼、獨ニ富ミ薩哈連州中ノ主要漁場ノ一タリ、同地方ノ漁獲高ハ一九二五年中僅カ
三千二百ツエントネルナリシ處逐年増加シ一九三三年度ニ於テハ七萬五千三百ツエ
ントネルトナレリ。一九三四年現在四百人ノ定着漁民アリ、七箇ノコルホーズヲ組

織シ漁業ニ從事シ居レリ。

(ハ)東海岸中部地方

同地方ハ調査及漁業施設未タ充分ナラス且ツ漁民數モ多カラサルヲ以テ現在ノ處成續著シカラサルモ秋鮭、鱒ノ外雜魚亦豐富ニシテ將來ヲ有スル地方ナリ。

尙同方面ニ多キ土人漁民カソヴィエト治下ニコルホーズ化ヲ強制セラレツ、アルハ政治的社會的ニ興味アル事實ナリ。因ニ一九三四年現在同地方ニ於ケル土人漁民ノコルホーズ六箇ニシテ外ニ露人ノコルホーズ三ヲ算ス。

(ハ)ルイブノフスキー區方面

薩哈連第一ノ漁業地方ト稱セラレ鮭、鱒ヲ主要漁獲對象トナス、鯨及雜魚類亦相當豐富ナリ、ウエレシチヤーギノハ漁業根據地ニシテ罐詰工場有リ。

主要漁族ノ分布ト之カ漁獲高ヲ知ル上ニ參考トナルヘキニ付一九三四年度(九月十

日現在)ニ於ケル北樺太兩沿岸ノ鯨、鱒、鮭、鱒族及其他一般漁類別コルホーズ漁獲成績ヲ示セハ左ノ通ナリ。

一九三四年九月十日現在漁民コルホーズ漁獲成績

(單位 ツエントネル)

地方	魚族名	鯨	鰯	鮭鱒族	其他魚族	計
地方	地方					
	ピリウオ區 (西海岸南部)	三七、二一四七、三二一			一三、四六六	五八、〇〇二
	亞 港 區 (西海岸中部)	二二、七三二、二六三		三八、一六二六〇		四一、二六六
	ルイブノフスキ區 (西海岸北部地方)	二、六一二	一七七、二九五、二〇、五二六			八一、四三三
	東海岸中部地方	二、二八七	一	一、一二八	三、四三一	六、八四六
計		六五、八四五八、五五七、七八、四六二、三四、六八三、一八七、五四七				

尙漁業ニ關係アル一、二ノ事業ヲ舉クレハ

(1) タングス、ストロイ

薩哈連ニ於テハ漁業用船舶類(發動機艇、川崎船、三羽船等)ハ最近迄國外又ハ大陸ニ之ヲ仰キタル處、今ヤ西海岸南部ニタングス、ストロイ(漁船建造所)建設セラレ地方的ノミナラス極東ノ漁業ニ取り必要ナル役割ヲ演セントス、一年ノ小型漁船建造能力二百五十隻ト稱ス。又同地ニテ漁業用容器ノ製造モ行ハレ、樽ノ年産能力ハ三萬三千箇ナリト云フ。

(2) 大平洋漁業研究所支部

亞港ニ在リ、各種ノ漁業専門調査ヲ行フ、一九三四年中薩哈連東海岸ノ一部ニ於テ魚族分布ニ關スル學術的調査ヲ行ヘルカ將來更ニ活躍ヲ見ルヘシ。

E、農業及牧畜

薩哈連ハ面積ノ大部分山岳地帯ニ屬シ且ツ一年ノ大半ハ農耕ニ不適ナル自然的條件ニ在ルヲ以テ農業カ他ノ産業部門ニ比シ振ハサル状態ニ在ルハ極メテ當然ナリ。

農耕地トシテ擧クヘキハツイミ河流域ノ中央平原地帯ノミニシテ其ノ農耕適地面積ハ十數萬ヘクタート稱スルモ猶殆ト開墾利用セラル、所ナク現ニ一九三四年現在島内ノ總播種面積五千餘ヘクターニ過キササル事實ハ何ヨリモ雄辯ニ農業不振ノ實狀ヲ語ルモノナリ。

栽培可能ナル作物ハ馬鈴薯、ウヤベツ、甜菜、人參、大根、胡瓜、燕麥、裸麥、小麥等トセラレ居ル處現ニ栽培セラレ幾分ノ成績ヲ擧ケ居ルハ右ノ内、馬鈴薯、ウヤベツ、燕麥等ニ過キササル有様ナリ。

近年ソヴイエト當局ハ馬鈴薯、其他ノ野菜類及糧秣トシテノ燕麥、乾草等ノ島内自

給自足ヲ目標トシ農村ノコルホーヰ政策下ニ銳意農業發展ニ努メ來レル結果、播種面積ノ擴張ニ於テ左表ノ如キ成績ヲ示セリ。

年 度	島内播種面積
一九二八年	二、〇一一「ヘクター」
一九三〇年	三、〇四四「々」
一九三二年	四、六二六「々」
一九三三年	五、二九四「々」
一九三四年	五、三四三「々」

集團農場化ノ成績

一九二七年ノ第十五回共產黨大會以來農村ノ社會主義化ハ當國農村政策ノ基調ヲナスニ至リ全國農村ヲ通シテ富農絶滅及コルホーヰ化ノ強行ヲ見タルハ世上周知ノコ

トナルカ右ノ結果邊陲薩哈連ニ於テモ農業經營ノ形態ニ次ノ如キ變化ヲ來セリ。

島内總播種面積ノ所屬パーセンテージ

年 代	個人 農	コルホーヰ集團農場	ソフホーヰ國營農場	其他
一九二八年	九六。〇%強	二。三%	一。四%	一
一九三三年	二。四%	五三。〇%	二六。〇%	三〇%
一九三四年		九〇%		

農作物ノ收穫ニ付一九二八年ト一九三三年トヲ比較セハ

島内農作物全收穫高

一九二八年	三四、〇〇〇 「ツェントネル」
一九三三年	二四五、〇〇〇 「々」

野 菜 類

一九二八年 三、〇〇〇 「ツエントネル」
 一九三三年 八二、〇〇〇 「々々」
 一九二八年 一四、四〇〇 「ツエントネル」
 一九三三年 一三二、〇〇〇 「々々」

馬 鈴 薯

又主要農作物タル馬鈴薯、燕麥、人參、ウヤベツ、甜菜等ニ就キ一九三二年及三三年ノ兩年ノ一ヘクター當リ平均收穫高ヲ比較スレハ左ノ通ナリ。

	一九三二年	一九三三年
馬鈴薯	四〇 ツエントネル	九一 ツエントネル
燕麥	七々	一一々
人參	五〇 々	八六 々
甜菜	五〇 々	九一 々
ウヤベツ	一〇〇 々	一七三 々

人口比較的稠密ナル亞港區ニ於テハ需給關係上馬鈴薯、野菜類ノ栽培漸次旺ントナリツ、アル處同區ニ於ケル一九三四年中ノ收穫成績及三五年度收穫計畫ハ左ノ如ク薩哈達州トシテハ良好ノ部ニ屬ス。

	一ヘクター當リ平均收穫	一ヘクター當リ最高收穫	一九三三年度計畫
馬鈴薯	四八 ツエントネル	七〇 ツエントネル	八〇 ツエントネル
ウヤベツ	一二四 々	一七三 々	一八〇 々
其他ノ野菜	四八・七 々	一一四 々	七五

牧畜ニ關シテハ近來機關新聞紙上ニ於テモ之カ振興策類ニ高唱セラル、モ概ネ抽象的言辭多ク統計其他具体的資料不十分ナル爲詳細ヲ明ニシ得サルヲ遺憾トス。

(一)牛及豚頭數一九三二年及一九三四年兩年度ノ比較ハ次ノ如シ。

牛 豚

一九三二年	三、六〇〇頭	三、六〇〇頭
一九三四年	四、八八六頭	一四、〇八六頭

(二)馴鹿

馴鹿ハ本島内部ニ於ケル輸送及交通機關トシテ一ノ重要役割ヲ演スルモノニシテ從來之カ飼育ハ主トシテ土民ノ生業ニ屬シタルモソヴイエト化後ハ漸次當局ノ手ニ收メラレ一九三一年西海岸ウイヤフトウニ州内隨一ノ國營馴鹿飼養場設ケラレ、薩哈連消費組合之カ管理ニ當リ頭數増加ニ努メツ、アリ。

島内ノ馴鹿頭數ハ一九二〇年日本軍占領當時ノ調査ニ依レハ一、四四六頭ト註セラレタルカ一九三四年ニ於テハ右ウイヤフトウ國營飼養場ニ於ケルモノ、ミニテ二、

六〇〇頭ニ達スト云フ。

(三)馬匹

當局ニ照會セルモ島内ノ馬匹數ニ關シテハ最近ノ調査ナシト稱シ又機關新聞等ニ於テモ馬匹ノ現勢ニ關スル材料掲載ヲ見ス之ヲ詳ニスル能ハサルハ遺憾ナリ。

セ、交通及通信

概 説

島内ニ在リテハ道路網ノ見ルヘキモノナク沿岸ニ於テハ一ノ良港灣モ存在セス加フルニ約半年ニ亘リ海面結氷ノ爲封鎖狀態ニ陥ル邊陲薩哈連ニ取り交通、通信狀態ノ改善ハ産業及文化發達上ノ根本問題ナリ。

帝政時代ニ於ケル交通上ノ施設トシテハ前世紀ノ末棄囚人五百人ヲ使役シテ中央道路(亞港—アルピンスク—オノール)ヲ開拓セシヲ最大ノ事業トシテ夫テ日本軍占

領時代ニ於テハ亞港ヲ中心トシ道路修理、橋梁架設等、幾多ノ著シキ施設アリ、就中大正九年八月ヨリ一年餘ヲ費シテ亞港―デルピンスク間ニ狹軌鐵道ノ敷設ヲ行ヒ島内ノ最重要地方ニ於ケル交通ニ一大改善ヲ施セリ。(註、右狹軌鐵道ハソヴィエト化直後破損ノ爲放棄状態ニ在リタルカ一九三四年ノ第二回州ソヴィエト大會ニ於テ之カ復舊工事開始方決議セラレタリ)

日本軍ノ後ヲ受ケタル現ソヴィエト當局モ交通問題ニハ少ナカラサル注意ヲ割キ來レルカ特ニ大陸―本島間ノ航空路ヲ開設シタルハ薩哈連ノ交通、通信方面ニ一新生面ヲ開キタルモノト云ヒ得ヘシ。

然レトモ現在ニ於ケル島内ノ交通、通信状態ハ極辛クシテ最小限度ノ必要ヲ充スニ過キサルモノト評シ得ヘク、道路網ノ擴張、沿岸各地ニ於ケル港灣改良施設、鐵道ノ敷設等緊要ニシテ且ツ急ヲ要スルモノ一ニシテ足ラサル實狀ナリ。

以下交通及通信網ノ現狀ヲ記セハ左ノ如シ。

A、道路

冬季(大体十二月ヨリ四月頃迄)ニ於テハ河海結氷シ、河川ノ横斷及沿岸交通自由トナルヲ以テ海岸地方及奥地共ニ橋(馬、犬、馴鹿)ヲ用フル交通ハ比較的便利トナルモ夏季ハ之ニ反シ橋梁ニ乏シキ河川ハ交通ヲ阻害シ、海岸地方モ亦斷崖多ク通行困難ノ地點少ナカラス、從テ薩哈連ニ於ケル陸上ノ交通及郵便物遞送ハ季節ニ依リテ其ノ條件ヲ甚ダシク異ニス

現在ノ島内主要道路及郵便物遞送路ハ左ノ如シ。

(イ) 夏季 (馬車便)

(一) 亞港―デルピンスク―ルイコフスコエ。

(二) ルイコフスコエ―オノール。

- (三) デルピンスターアドツイモウオ。
- (四) アドツイモウオーノーダリキ。
- (五) 亞港ーホエ。

(四) 冬 季 (極便)

- (一) 亞港ーデルピンスタールイコフスコエ。
- (二) ルイコフスコエーオノール。
- (三) オノールーピレウオ。
- (四) オノールーランゲリ。
- (五) デルピンスターアドツイモウオ。
- (六) アドツイモウオーノーダリキ。
- (七) ノーダリキーカタンタリ。

(八) ノーダリキーオハ。

(九) 亞港ーニコラニフスタ。(海峽ノ結氷狀況如何ニ依リ開通セサル年モアリ)

(十) ウエレシヤギノーニコラニフスタ。

(出) ウエレシヤギノーオハ。

尙冬季極便ヲ以テオノール、半田澤間ノ南北樺太國境線上ニ於テ本邦トノ定期國際郵便物ノ交換(一週二回)行ハル。

B、鐵 道

現在北樺太ニ於テハ鐵道ハ唯一線即チ

オハーモス&リウ分間 三七軒

アルノミ同線ハ一九三〇年中起工翌年竣工セルモノニシテモスカリウ分港ハ東北背後ニ島内第一ノ工業地ヲハヲ據シ西方對岸ニ尼港ヲ控フル本島西海岸北部ノ要衝ニ

シテ本鐵道ハオハト大陸間ノ交通運輸上至大ノ意義ヲ有ス。

C、航空路

一九三〇年一月非軍用極東航空局ニ依リ大陸—薩哈連間ニ飛行連絡開始セラレハバ
—ロフスタク及本島間ノ距離ヲ四時間乃至六時間ニ短縮シ交通、通信上ニ一新紀元ヲ
劃セリ。

第一回ノ試験飛行ハハバ—ロフスタク—オハ—亞港—ハバ—ロフスタクノ線ニ依リテ
行ハレ好成績ヲ收メタルヲ以テ定期航空路設定ニ決シ同年中三機ヲ配シ「哈 府
ハバ—ロフスタク

—オハ」、
「哈府—亞港」ノ二線ヲ主トシ（オハ—亞港間モ稀ニ飛行セリ）定期旅
客郵便飛行開始セラレタリ。

其後年々季節ト依リ實施狀態同シカラス、且ツ使用機數ノ増減、發着表ノ變化等アリ
タルカ鬼モ角間歌的ナカラ實施セラレテ今日ニ及ヘリ、而シテ一九三四年夏季ノ如

キハ「哈府—亞港—オハ」ノ線頗ル頗繁順調ニ行ハレ成績漸ク見ルヘキモノアルニ
至レリ。

薩哈連航空連絡ノ正確ヲ期シ難キハ自然的條件ノ然ラシムル所ニシテ冬季ハ荒天多
ク夏季ハ濃霧ニ妨ケラレ春秋二季ハ解氷、結氷ノ爲發着場一時使用不能トナルヲ以
テナリ。故ニ名ハ定期飛行便ト稱スルモ事實ハ不定期ナルヲ免レサル實狀ナリ。
一九三四年夏季ノ實施狀況左ノ如シ。

(1) 航空路

哈府—オハ

約五時間

哈府—亞港

約四時間（レコードハ二時間四十五分）

オハ—亞港

約二時間

(2) 使用機

十二人乗（水上機、モーター三箇付、時速一五〇軒）二臺。

外ニ郵便専用機二臺ヲ配スヘキ旨發表セルモ實施ヲ見サリキ。

(ハ)發着表（豫定）

夏季

哈府―オハ間 月 九回

哈府―亞港間 々 八回

オハ―亞港間 々 八回

冬季

四日ニ一回ノ割合ナル旨發表

事實ニ於テハ右ノ豫定通り實施セラレサリシコト前述ノ通ナリ。

且ツ春季（五、六月）及秋季（十、十一月）ニ於テハ發着場ノ關係上飛行ハ中絶ス

ルヲ常トス。

右ノ外目下當局ニ於テ計畫中ノ航空路ヲ舉クレハ次ノ如キモノアリ。

(イ)浦潮斯德―薩哈連―勸察加線

一九三四年夏本航空路ニ依ル定期連絡開始ノ計畫發表セラレタルカ實施ニハ至ラス
唯一回亞港―ペトロロフ―ウロフスク（勸察加）間ノ無着水飛行行ハレ往復飛行所要
時間十一時間五十分ヲ以テ之ニ成功セリ。將來本航空路定期設定セラル、コト、ナ
ラハ極東ノ交通上將又軍事上重要意義ヲ有スルニ至ルヘシ。

(ロ)島内線

亞港―ルイコフスコエ―デルピンスク―アリバーノ―ダリキ線ニ依ル島内航空路開
設ノ計畫アリト報セラル、モ亦現在ノ處實現ニ至ラス。

要スルニ現狀ニ於テハ薩哈連ノ航空事業ハ猶發達ノ域ニ達セサルモソヴィエト當局カ

之ニ多大ノ注意ト資カヲ割キ居ルハ事實ニシテ前記非軍用機ノ外亞港ニ國境警備隊所屬ノ格納庫アリ飛行機三臺ヲ有シ絶ヘス飛行練習ヲナシ居ルハ僅々數年前ニ比シ大ナル變化ト云ハサルヘカラス。

D、海上交通

屢述ノ通毎年十二月ヨリ翌春四、五月ノ間ハ結氷ノ爲東西兩岸トモ船舶ノ航行杜絶スルヲ常トシ強ヒテ沿岸ニ來航スルモ流水及時化ノ爲荷役不能ノ日多ク空シク沖合ニ避難碇泊セサルヘカラス。例ヘハ一九三四年春浦潮ヨリ亞港沖ニ第一船ノ來航シタルハ三月十六日ナリシカ時化及流水ニ妨ケラレ同船八月餘ニ亘リ碇泊セリ。又同年秋木材積取ノ爲西海岸ニ來レル一日本汽船ハ九月二十日來航後荒天ノ爲荷役ヲ行ヒ得ヌニケ月ニ亘リ避難碇泊セリ。

即チ比較的平穩ニ航海シ得ルハ五月ヨリ九月中旬迄トス(註、石炭利權契約中ニハ航

海期ヲ五月一日ヨリ九月十五日迄ト定メ居レリ)

現在薩哈連沿岸ニ於テ貨客輸送ノ爲實施セラレ居ル航路ハ左ノ如シ。

(イ) 浦潮新德—亞港—尼港間。

定期ト稱スルモ確實ナラス。

(ロ) 尼港—オハ—カウングリ—ラングリ—浦潮新德。

不定期

(ハ) ビレウ—オ—アグネウ—オ—土威—亞港—オ—ニ—ウ—イ—フ—ト—イ—キ—ビ—。

不定期

外ニ日本—オハ間ニ石油積取船(邦船及特務艦)及日本—土威間ニ石油積取船(邦船)何レモ郵便物ノ輸送ヲモ行フ因ニ一九三四年ノ航海期中之等兩航路ノ積取船來航數ハ左ノ如シ。

オハ—日本線(石油)

特務艦及汽船合計

四〇隻

土威—日本線(石炭)

汽船

三二隻

E、郵便、電信

郵便

郵便物ノ遞送ハ大体上述ノ道路、航路及船便ニ依リテ行ハル、重要港、オハ等ノ如ク比較的良好ナル條件ニ在ル地ニ於テスル大陸其地トノ郵便物交換ハ兎角開港ノ缺キ多大ノ日子ヲ要スル實狀ニシテ況ヤ輸送機關及運路網ノ不完全ナル島内一般ノ通信カ概メテ不正確ナルハ言フ俵タス

電信。電話。

島内ノ電信及電話線ハ左ノ如シ。

右線

亞港—豐原間

土威—亞港—ウエレシテヤギノ—オハ間

ボギビー—ラザレン岬（海底）

（右）無線

無電局ハ亞港。ウエレシテヤギノ。オハ。ビレンガ。カタンタリ。ビレウオ。ハ
ンドーザニ在リ。

右ノ内亞港、オハハ大陸ト交信ヲ爲ス。

（左）電話

日本軍占領時代ニ架設セラレタル亞港市内電話及土威、アグネウオ、ホエ、デル
ピンスタ、ルイヨフスコエ、オノール間ニ市外電話アリ。

オハトキヤタローボロマイ間。カタンタリ—ノーダリキ間。ヌトウ—チヤイウオ
間ニ北樺太石油會社ノ私設線アリ。

79

（一）一九三四年二月中ハバーロフスタ—亞港間ニ無線電話開通シ大陸トノ交話可能ト
ナレリ。

八、教育及衛生

帝政時代本島ニ存在セシ學校ハ補習學校一、高等小學校一、尋常小學校十一ニシテ文部省ノ管轄ニ屬シ外ニ女子教育ヲ行フ宗教學校アリタリ、一九一四年當時ノ生徒數ハ男兒二三二人、女子一九二人計四二四人ニ過キス。又教育補助機關トシテ行政官署ノ援助ノ下ニ亞港及ルイコフ村公會堂ニ開設セル圖書館アリタリ。其ノ後革命ノ變亂ニ際シ之等教育機關ニ對スル國庫支辨ノ途絶ユルニ及ヒ圖書館ハ影ヲ没シ、學校モ亦相續テ閉鎖スルノ已ムナキニ至レリ。

當時ニ於ケル教育普及狀態ヲ見ルニ南部地方ニ於テ文字ヲ知レル者ノ割合ハ八歳ヨリ十三歳迄ノ學齡兒童五百三十四名中男子四十五%女子三十八%、十三歳ヨリ十七歳ニ至レハ男女四百五人中、教育アルモノ男六十一%、女四十九%、更ニ大人男性ノ文字ヲ知レル者ハ總數ノ四十七%ニシテ住民全体ヲ通スレハ四十一%ニ過キサリ

シナリ。

一九二五年島内ノ行政權ソヴイエト政府ニ移リ爾來當局ハ（州内ノ教育行政ハ州執行委員會教育部之ヲ掌ル）社會主義教育ノ基礎ノ上ニ先ス文盲退治ニ着手スルト共ニ島内ノ文化機關ノ擴充ト教育ノ普及ヲ計リ來レル結果一九三四年ニ於テハ文盲者及淺學者（註、辛フシテ文字ヲ解スル者ノ義）ノ數モ減少シ人口七萬二千人ニ對シ約一萬人ノ割合トナリ量的ニハ教育普及ノ實績ヲ舉ケツ、アリ、然レトモ島内ニ初等義務教育制ノ實施セラレタルハ漸ク一九三二年ニシテ尙現在ニ於テハ校舍、教員、教科書類ノ不足、校内設備ノ不完全、其他幾多ノ外面的及内部的缺陷ニ苦シミツツアル實狀ニシテ質ノ上ニ於テ如何程ノ成績ヲ舉ケツ、アリヤハ俄ニ斷シ難キ所ナリ。

一九二六年以來ノ各種學校數增加ノ跡ヲ見レハ左ノ如シ。

一九二六年	二五校
一九二七年	二七々
一九二八年	二八々
一九三〇年	三三々
一九三四年	九九々

而シテ右一九三四年ノ九九校ノ内譯ハ次ノ通ナリ

小學校 (四級)	七〇校	生徒數	一〇、二七七人
中等學校 (九級)	三校	生徒數	二、七四九人
中等學校 (七級)	一六校		
北方民族學校	一〇校		

右ニ對スル教員數

四〇八人

デツキーサツド

此ノ外ニソウイニト黨學校亞港及才ハニ各一箇アリ又州内ニ幼稚園十二存ス。

次ニ一九二五年以降ノ初等學校就學兒童數増加振ヲ示セハ左ノ如シ

一九二五―二六年度	八八〇人
一九二六―二七年度	九二七人
一九二七―二八年度	一、一四八人
一九二八―二九年度	一、一五六人
一九二九―三〇年度	一、八五八人
一九三一年度	三、二〇〇人
一九三三年度	一、三〇〇人
一九三四年度	一〇、二七七人

而シテ薩哈連州ニ於ケル教育事業ニ對スル支出額亦逐年増大シ殊ニ近年學校建設ニ

件と教育事業擴大セラレ之ニ要スル支出額ハ著シク膨張セリ、一九二八年以降判明セル所ヲ記セハ次ノ通ナリ。

一九二八年	一八〇、〇〇〇	留 ブル
一九二九年	二二二、〇〇〇	々
一九三〇年	三二三、〇〇〇	々
一九三三年	三、二〇〇、〇〇〇	々

其他ノ文化機關

學校ノ外文化機關トシテ舉クヘキモノハクラブ（劇場ヲ兼メルコトアリ、各種集會、催物ヲ行フ）活動寫眞館、赤室、ラジオ等ナルカ州内ニ於ケル右数字ノ判明セルモノヲ記セハ（一九三四年現在）次ノ如キモノアリ。

ラジオ放送局（亞港）

一

放送開始期ハ一九三五年一月一日、波長四五二。二米、

局符號PB（エム、ヴェー）三八

ラジオ聴取設備 一、六三八

活動寫眞設備 二〇

クラブ 二二八

赤室 一四五

博物館 一

醫療設備

衛生事項ハ州保健部ノ管掌スル所ナルカ近年當局ハ州内衛生狀態ノ向上ニ多大ノ努力ヲ拂ヒツ、アリ。地方豫算ノ如キモ教育及衛生事業ヲ其ノ主要支出對象トスル實狀ニシテ一九三四年度ニ於ケル衛生關係支出額ハ六十萬留ニ達セリ。當局ハ之ヲ以

テ病院建設及之ニ伴フ醫療施設ノ擴充ヲ計ルト共ニ地方隨時強制命令ヲ發シテ住民ニ對シテプス其他傳染病ノ豫防注射ヲ行フ等帝政時代ニ比シ衛生方面ニ於ケル進歩ハ認ムヘキモノアリ。從テ往時ニ於テ發生頻々タリシ壞血病ハ一、二年來殆ト驅逐セラレテプスノ如キモ著シク減少セリ。

一九三四年現在ニ於ケル州内ノ病院數ハ一八、醫師八八人、助醫一八五人ニシテ病院ノ設備ハ一般ニ完備セリトハ評シ得サルモ亞港、オハノ如キ主要都會地ニ於ケル病院ハ相當近代の設備ヲ有スルモノナリ。

薩 哈 連 州 略 圖

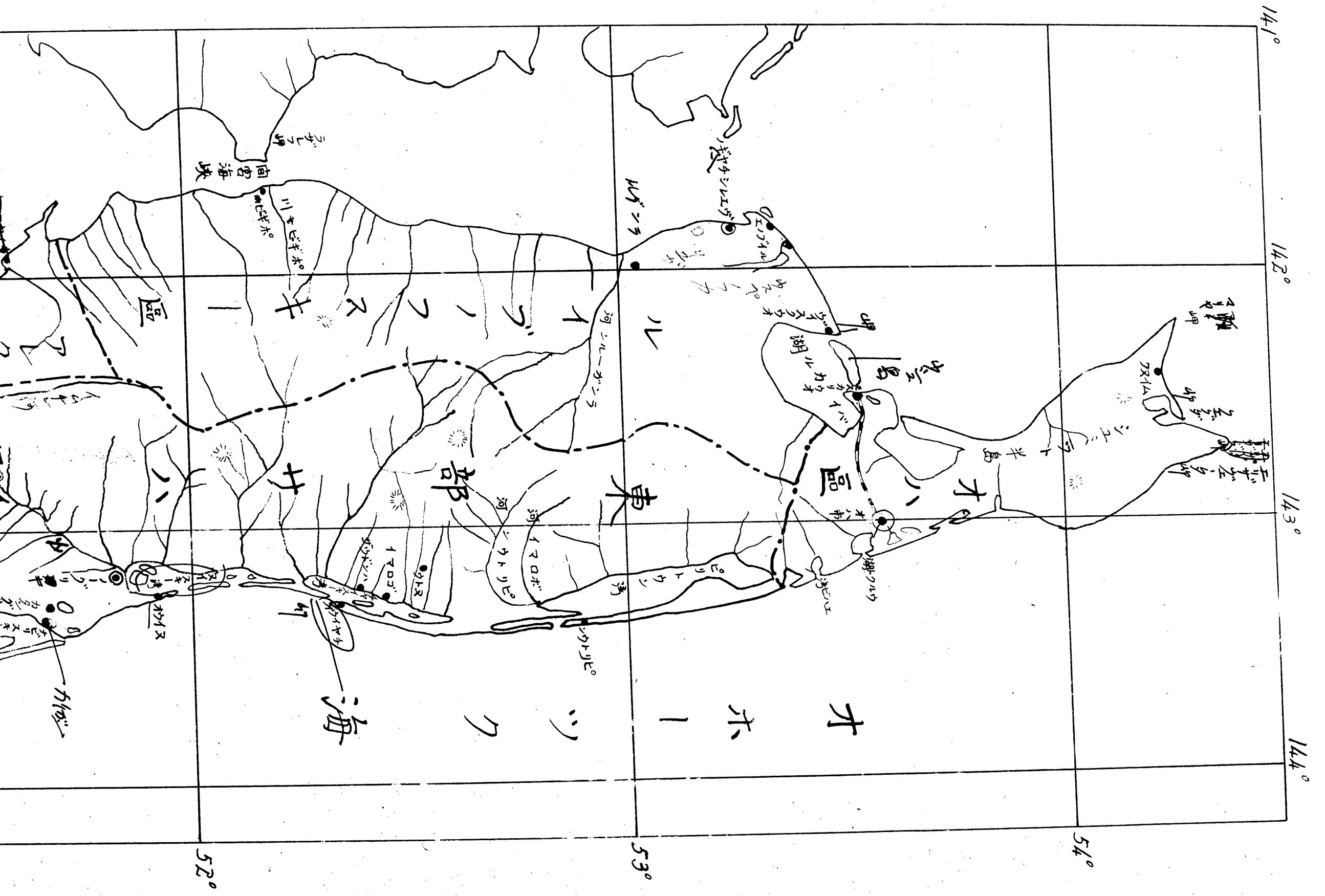
備 考

——ハ區境界（州執行委員會ノ説明ニ從ヘリ。

本文第二二頁參照

◎ハ區執行委員會所在地

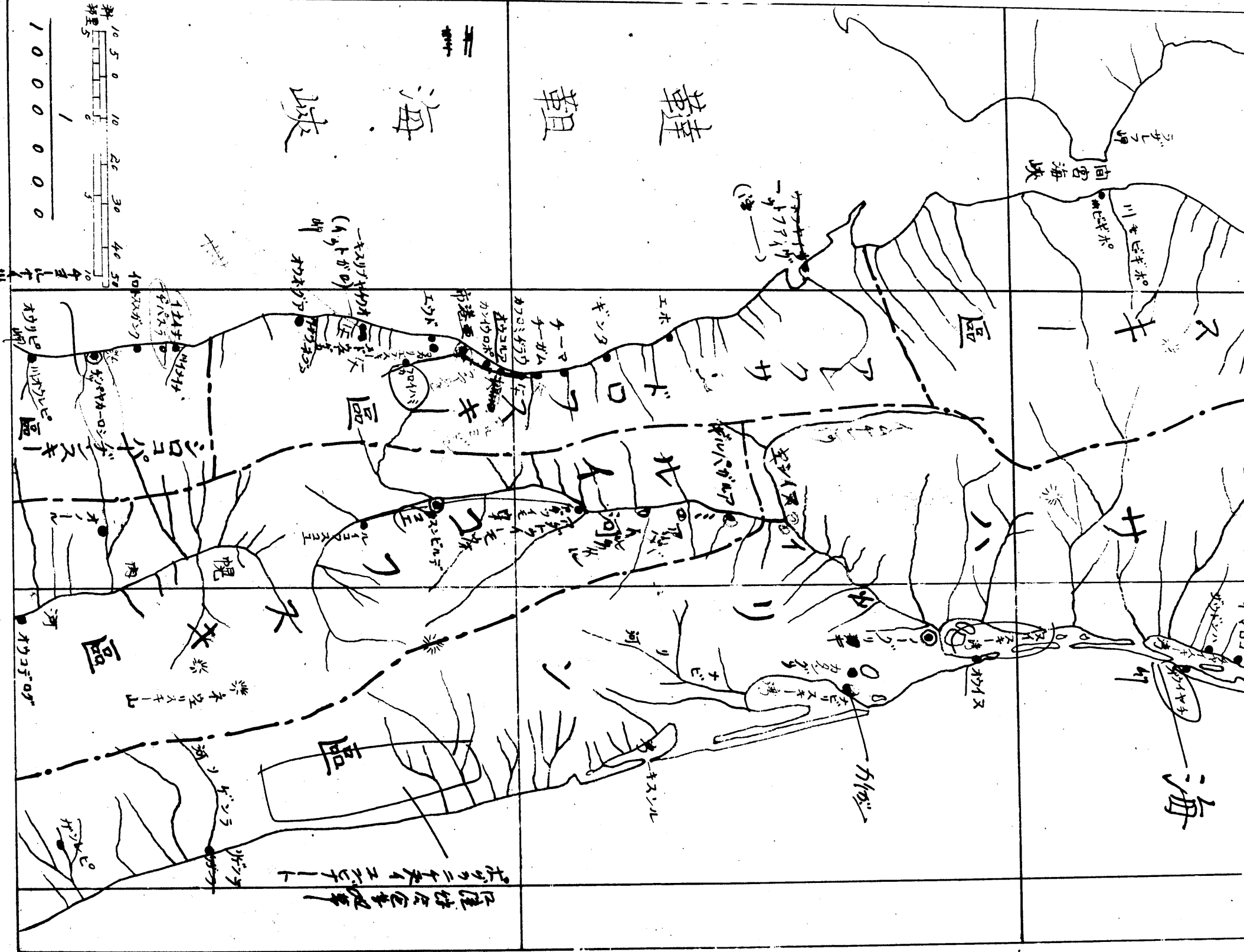
●ハ市ソヴィエト所在地



52°

51°

50°



韃 菴 海 峽

牛

海

向宮海峽

川 牛 洋 水

區

ア ク サ

エホ

ギツク

クーガム

カコミカワ

カコヨロ

カマカワ

カマカワ (A, Tガ) 峠

区

北

河

槐

区

區

区 陸 地 在 地 事 状

